

小宮豐隆
和辻哲郎 編集

中勘助全集

第四卷

角川書店

中 勘 助全集
第 四 卷



昭和三十六年四月十五日 初版發行
昭和四十二年八月三十日 五版發行

定價 一五〇〇圓

著 者 中 勘 助 なか かん すけ

發 行 者 角 川 源 義 かくがわ げんぎ

印 刷 者 中 内 あ き 子 なかに あきこ

製 本 者 鈴 木 俊 一 すずき ぶんいち

發 行 所 株式會社 角 川 書 店 かくがわ しょてん

東京都千代田區富士見二ノ十三
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話東京 (286) 七一一 (大代表)

© K. Naka 1961

Printed in Japan

落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

沼のほとり

三

蜜蜂

七

短篇 (四)

三

郊外 その一

二三

孟宗の蔭

三四

郊外 その二

三七

東京

三四

あとがき

三九

沼のほとり

大正九年三月四日

餘寒が強い。粉雪がちらちらふる。長保寺執事といふ名で二月二十八日附の秀海さんの死亡通知がきた。豫期してたことだから驚きはしなかつたが二十八日ごろ東京から送らせた果物の罐詰がまにあはなかつたのが残念だ。その前日ぐらゐにこちらから出した手紙もまにあはなかつたわけだ、折角パインアップルや、チェリーや、桃や、いろいろまぜて急いで送つてもらつたのに、あれは私がこちらへ越してまもなくだつた。思ひがけなく長保寺執事の名で郵便がきた。それは前の住所をまはつてきたため出てからよほど日數がたつてゐた。その文面は

拜啓甚だ突然の義に候へ共秀海儀大分大患と相成居日日御貴殿様の御事申居候に付矢張表記の御宅に御住居被遊候や絶筆の御禮狀差出度様子に付恐縮をも不願御伺申上度不取敢以略書御願
申上候拜具 二月五日……中勘助様 和歌山縣海草郡□□村長保寺執事

といふのであつた。秀海さんと別れてからもう四五年にもなるだらう。はじめのうちはなにかの折に思ひ出すこともあつたがいつとはなしに忘れてたところへこんな郵便ですつかり驚かされた。尤も病氣で國へ歸るときにあの訥辯とつべんで

「中さんにはほんとにお世話になりました」

と一言いつていつた。私のはうではなにもそんなに世話したつもりもなかったたのでその事柄はわかつてたがそんなに深い意味ではなく世間なみの挨拶だらうと思つてゐた。郵便のきたのはひどく寒い風のふくおそろしく路のわるい日だつた。私はもう死んでるのぢやないかしら　といふ懸念もしながらとにかく見舞の電報をかけに出かけた。同時に手紙もかいた。病状も精神状態もわからないのであるべく平凡に、興奮させるやうなことのないやうにかいて、執事の人あての返事の遅れたことについてのことわり状と同封にして病状次第適宜にとりはからつてくれるやうに頼んでやつた。執事の人のかねて話にきいてた秀海さんの師僧であらう。それから所用のため上京。六日ばかり滞在して歸つてきたのは二月の二十七日だつた。留守のあひだにはうばうから手紙がきてゐた。そのなかに秀海さんからのがあつた。自筆だ。

其後は誠に御不沙汰致しました。御許下さい。しかし中さんの事は毎日思はぬ日とてはないのです。時々寫眞を見ては一層思にこがれて居るのです。母とよればあなたの御噂しては御親切に感じ入目に涙の露を宿すのであります。此程も母が朝ず水（手水みづ？）の初お（初穂？）に毎朝東の方に向つて中さんの御達者を祈つてゐるんやで、お前の思人（恩人？）じやものねと云つた時嬉しかつたです。さて私の病氣は一進一退時には殆どよくなり山越で有田へ行つた

それなりになつてしまつたのだ。で、今ここに書きつづけるのだが、思ひ出といつてもその後月日もたち、それに秀海さんとは年もよほどちがつてたので今はもうこれといふ話もない。そのじぶん私は三十前後、秀海さんは二十ぐらゐで天台宗中學の一年生だつた。私たちはひとつ寺にゐたのである。ある日茶の間の爐ばたで話してたときに 一年生にしては年をとりすぎるぢやないか といふやうなことから、秀海さんは自分が普通の中學を何年とかまでやつてから非常に信心ぶかいお母様を喜ばすために思ひたつて坊さんになつたといふこと、その決心をお母様にうちあけたときにお母様はたいそう喜ばれたといふやうなことを國訛りのぬけない訥辯でつかへつかへ話してきかせた。私はそれをきいて 今の世のなかにはともありさうもない奇特なことだ とも思ひ、また自分を恥ぢいるやうな氣にもなつた。さうしてそれからはいかにも善良で信心ぶかい秀海さんがいつそう好きになつた。私はそのじぶんの氣もちで、垢はつきはうだい、髪もひげものびはうだい、著物も汚れはうだいにしてたところ、ある日やはりおなじ茶の間の窓ぎはに二人きりでゐたとき秀海さんはだしぬけに 中さんはよくそんなにして平氣でゐれますね といふやうなことをさも感心したらしくいつた。その後、平生はひとつ山内のほかの寺へつめてゐるときどき自分の寺へ歸つてくる住職の人から すこしはみなりも氣をつけてくれなければ といふ穩な戒告をうけたので迷惑をかけてはすまいとおもつて床屋へいつた。さうして鏡にむかつて椅子にはかけたものの床屋の職人たちは顔を見あはせて

ゐてちよつと手をつけかねる様子だつたが、ありがたくない客とおもつたかなんのかのと人を馬鹿にするやうなことをいひあつて笑つた。私のはうではまたいくらかそれがをかしくていつしよに笑つてゐた。そこへ親方が出てきて職人たちをたしなめ、私に詫びをいつてやうやく髪が刈つてもらへることになつた。ところがさうして髪を刈り、ひげもそり、湯屋へもいつてみると私もちよつとそれまでとは氣がかはつて私一流の身だしなみをするやうになつた。そのうちおなじ茶の間で秀海さんがまだしぬけに 中さんはおしやれですね といった。私は先のとときとおなじくだ うむ といふやうな返事をした。それからまたあるとき秀海さんはおなじやうな唐突ないひだししかたで 僕中さん好きですよ といった。そして なんでもはきはきしていい といふやうな説明をつけた。—— あんまりはきはきでないこともあるのだが。—— 秀海さんはそのとき私の額からもみあげのへんへかけての生えぎはをみて、ちやうどそんなふうだ といった、妙な譬^{たとへ}だが。そのほかには棒押しをやつてへたへたに負かしてくやしがらせたことぐらゐしかおぼえてゐない。秀海さんとは三四年もいつしよにゐたらうか。そのあひだに秀海さんはただの一度もひとに悪い感じを與へなかつた。生れつきの善良でなくばできないことである。およそ凡夫同士の恩誼の關係は終をまつたうしないことが多い。それを秀海さんと私はこのやうにきれいに生と死とに別れることができたのは幸なことであつた。私は知らないが、秀海さんは「向ふむいてゆく」ところを知つてたからそこへ行つたのだらう。

六月三日

あけがた夢のなかで

ななとせの昔はかれやこの人を照る日のごとくこひもせしかな

さめてのち數へてみれば今のじぶんを十年も若くしてゐた。

某月十六日 東京にて

私はこの頃うきをけづることに憂き身をやつしてゐる。兄はこのあひだの晩俄に癡癲をおこして床についてから釣のお友達、といふよりは先達の□さんに教はつてうきをけづることをはじめた。兄は出来あひのうきのなかで氣にいつた形を見本にしてけづりだったが、出来あがらないうちに横になつて私に やつてくれ といった。桐の箱のこはれを材料にしてナイフでけづり、鑢やすでするのだ。漆は□さんにぬつてもらふつもりらしい。見本よりもすこし大きくとか、もうすこし小さくとか、それに曲線のぐあひが非常にやかましい。兄は確に美しい線をしつてゐる。私のけづるうきの線がごくわづかでも見本のとちがつてるとこちらの氣がついてゐるその缺點をちや

んと指摘する。指摘といったところで……併しどうせけるものなら善し悪しのわかるはうがはりあひがある。角の柄のついたジャックナイフだ。私もものぐさなところはありながらいつたん手をつけたとなると満足するまでやらなければ氣がすまないはうだ。兄は美術品などにはいつかう興味をもたないくせに釣道具となるとなかなか眼をもつてゐる。……兄が十つくつてくれといふのを姊が

「そんなにいけない。ふたつつ」

といふやうなことをいつて二つにさせる。骨は折れるし、暑いのでシャツ一枚になつて、そこらぢゆうを削り屑だらけにして細工場めかしながら毎日毎日一所懸命嬉しくやる。荒削りのうへを加減をしいしい鑢をかけてうまい線をだすのがなかなかだ。……やつと二つこしらへたらあとからあとからとねだられてたうとう十ばかりもつくつた。隣の部屋でやつて、一つできると兄のところへもつてゆく。と、それを「うきさし」——かりにさう名^{なづ}けておく。小間物のひつてた桐の箱のふたに小さな穴をあけてうきをさして立てておくやうにしたものだ。——にたててほかのと見くらべては　うむ　とさも満足らしく枕もとにおいたり、手にとつたりして一日ぢゆう眺めどほしにしてゐる。

兄はまたぞろ徳利型の小さなを見本にだして　かういふのを十つくつてくれ　といふ。で、勉強してその厄介な恰好のを十こしらへた。そのほかお好みによつてほかの出来合のものの頭を

すりへらしてちがつた形にしたり、私の創意に成るうきもこしらへたのでしまひにはいろんな形のうきがうきさしに林立した。そんなにしてるうちに兄は床をはなれて私がうきをけづつたり、暮をおいたり、姉が繪をかいいたりするのをそばへきて見るやうになつた。

十二月三十一日

私は昨日午後久しぶりで我孫子^{あびこ}へきた。家の用事もあらましかたづいたので松の内ぐらゐるこちらにゐて、それから「提婆達多^{ていばだつた}」の校正のために上京し、それがすんだらこちらで靜に暮さうといふのである。私は朴齒^{ひよ}の日和^{ひより}をはいて雪がちらほら降りかかる寒い日を子の神^ねのはうへ散歩した。雪がふるとまたしばらく出られないのでそのまへにすこしでもこの頃の運動不足をとりかへしたい。風はないが頬が凍るやうにつめたい。外套の襟を立てて凍つた沼べの路をからからとあ
るく。

頬かむりの婆さんが

桧のなかからつまみだす

からからのそら豆

ほりかへした畑の

穴ぼこになげこまれる

ひからびたおまへが

春になつてあの美しい花をさかすとは

おら不思議でなんねえ

和辻京子ちゃんに

おいしい　おいしい　桃みたい　京子ちゃん

あんまり　うまさうだから　こんだいって　たべちまふ

でも　たべちまつて　京子ちゃんが　なくなつたら

中をぢちやまは　ひとりぼつちで　ほんとに　つまらない

粉雪がしんしんとふる。沼のむかう岸がときどきほんのりとみえてはまたかくれてしまふ。灰色の靄みたいなものが沼のうへにたちこめて重くろしく水が淀んでゐる。汀の枯葦もさびしい。渡し場の藁屋根もおもしろくなつた。麥畑、葱畑も埋まつてきた。桐や、無花果や、柿や、櫛の裸木、柑子みかんの暗緑の葉にも雪がつもつてきた。山里は冬ぞさびしさまさりける……その歌がるたの繪にたしかこんな景色がかいてあつた。そのかるたの歌と繪がほんの小さな子供であつ

た私にまだ見ぬ自然に對する憧憬をどんなに深くうゑつけたであらうか。その古い憧憬をかなり自由にみたすことのできる今の私をどんなに幸福に思ふことか。私は机に肘をかけて火鉢に手をかざしながらこのさびしい沼への雪景色を靜にしみじみと眺めてゐる。

四谷へこしたのは十一月の二十七日かであつた。二三日したら兄はわかさを釣りにゆきたくなつた。こしたばかりで家の者は目がまはるほど忙しいので自分ひとりで行くといつて電車の乗りかへやなぞやいやいと姉にきいておぼえようとしてゐる。私ははじめての路をとてもひとりやる氣になれないので

「行くのならひとりでわかるるところまでついてあげませう」

といつたら兄はほつと安心したらしかつた。併し私も知らないところゆゑ兄と行く日の前日だつたかひとりでわざわざ下見に出かけて電車の乗りかへの都合なぞをしらべておいた。で、省線につて萬世橋であり、須田町から錦糸堀行にのることにきめた。家がかはつたためにそれまでの道中がわからないので錦糸堀行につてしまへばそれから先はこれまでどほりだからひとりでける。私は往きにむかうまでついていつて、歸りには省線のかはりに市街線のはうを實地研究するといふことにした。こんなこととなると自分がけんのん性なのでひとのことも必要以上に氣をつかふきみがある。……私たちは出かけた。兄は洋服に下駄、必要品をいれた魚桶^{ういづ}を肩からかけ、つなぎ竿の袋をもち、色の褪^おせきつた中折帽といふ異様のいでたちで、私はこのあひだち